

## 「生徒の声を聴くことこそ、これからの歩み」

校長 高田 晶子

8月28日（金）に1学期終業式を終え、9月1日（火）から2学期が始業しました。気温の高い日が続き、夏バテ気味な体も、仲間との生活が継続するにつれて、生活リズムを取り戻してきているようです。過ごしやすい秋の訪れまでもう少し辛抱が必要でしょうか。

さて、先日、3年生に対し、今年度の修学旅行は中止となった連絡をしました。当初の予定の6月から11月に延期をし、実施の可能性を探ってきましたが、本当に残念ではありますが、中止の決断となりました。73期生の皆さんは、その決定をしっかり受け止めてくれました。

今年度、学校行事が次々中止となり、「何かできないか」という模索は、校内では、現在も継続して話題となっています。

最近のニュースの中で、今年度、大学に入学した一年生の話が気になっています。「入学したのに一度も大学に通学していない。課題のレポート作成やオンライン授業ばかりで、誰とも接していない。」という話でした。「何のために、大学生になったのだろう。」という声には、はっとさせられました。これは、本校にも当てはまる点を感じました。「安全第一」「健康第一」「感染拡大防止の対策」の思いだけで、学校教育活動を進めようとしていたのではないか、ということです。

確かにこれらは大事な観点で、疎かにしてはいけないことです。しかし、現状の実態に応じて工夫しながら教育活動を展開するのが、学校教育の役割です。学校外には、家庭教育、社会教育という教育分野があるわけですから、それぞれの力を再結集し、子どもたちを成長させていく。学校教育の意義を確認できたように思いました。何でも学校ではなく、何でも家庭ではなく、何でも社会（地域）ではないのです。それぞれの力を生かしながら進めていくことが大切な教育というものです。もちろん、学校が困ったときに、家庭に相談したり、地域に相談したりすることは、忘れてはいけないことです。

コロナ禍の現状を一番理解しているのは、73期生なのかもしれない、と感じるアンケート結果があります。「コロナだからこそ、普段体験ができないような体験をしてみたい。」「コロナにかかってしまったり、広まってしまうリスクが少しでもあるなら躊躇せずに活動をやめる。」「集団行動は無理だと思う。どうしても、密になる。」

現実をきちんと受け止めている生徒たちの声を聴くことこそ、これからの学校教育活動の方向性を示す原点だと、反省しているところです。2学期も生徒と共に歩んでいきます。